

日本YMCA同盟

THE
YMCA

The Young Men's Christian Association News



No.847 2025

2025年6月1日発行（毎月1日発行）
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料63円）
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号
Tel 03-5367-6640 Fax 03-5367-6641
URL：https://www.ymcajapan.org/
発行人／田口 努 編集人／横山 由利亜



「第1回アジア太平洋クリスチャン・ユース・アッセンブリー」2024年9月 @韓国・済州島

OPINION

気候危機を、市民の力で変えていく

認定NPO法人 FoE Japan 理事 吉田 明子

FoE Japan (エフ・オー・イー・ジャパン) は、世界73カ国で活動する「Friends of the Earth International」のメンバー団体として、日本では1980年から活動しています。当初、若い世代との接点はあまりなかったのですが、2018年にスウェーデンのグレタ・トゥーンベリさんが一人で国会議事堂前に座り込みを始めた数カ月後、日本でもやろうと10数人で集まったことがきっかけで、日本でも徐々に若者たちの気候ムーブメント「Fridays For Future」の動きが広がっていきました。FoE Japanなど環境団体もこの動きをサポートしたり連携したりしており、2023年には新たなネットワークとして再エネ100%と公正な社会をめざす「ワタシのミライ」を発足。署名活動や各種イベントの運営、提言活動などを行っています。



若い人たちは学校でSDGsなども学んでいますから、知識も関心も高いです。またここ数年、暑さで体育の授業や部活ができなくなるなど、日常生活にも影響が生じているので危機感も持っています。それなのに国のレベルでは実効性のある対策が見えないし、むしろ逆行している。知れば知るほど将来に絶望感を抱いてしまう若者たちは少なくありません。

FoEでは環境問題を格差の問題でもあると考えています。先進国といわれる北側の国々が大量に化石燃料を使ってきた影響を今、南側の国が受けているという南北の格差問題。また、富裕層よりも貧困層にしわ寄せがいく貧富の格差。現世代が残した問題のツケを将来世代が負う世代間格差など。私たちはこの格差を是正し、平和で持続可能な共生社会をめざすため、「気候正義 (Climate Justice)」を唱えて活動しています。

ところで、温室効果ガスの削減というと、暑い日に冷房を我慢するような節約と考える方がいます。経済の発展と相いれないという意見も聞きます。しかしCO2削減は、生活レベルを変えなくても、たとえば電力契約を風力や太陽光など再生可能エネルギー由来のものに切り替えるだけでも半減できます。省エネタイプの家電を選ぶ、家の断熱効果を高くする。そういった工夫でも減らせます。オンライン会議の普及も、削減につながりました。私たちは「自然エネルギー100%で豊かに暮らせる社会を創る」ことは可能だと考えています。

とはいえ気候危機は深刻です。今すぐ対策を講じて簡単には止められる状況ではありません。それでも私は、「動けば、変化は起こせる」と信じています。

国の施策はなかなか思い通りになりませんが、地方自治体の多くがすでに2050年までのゼロカーボンを目標に掲げ、再エネ・省エネに取り組み始めています。また世界でも日本でも、市民の動きが政策を変化させた事例はたくさんあります。環境先進国といわれるドイツでは、酸性雨の問題やチェルノブイリ原発事故から人々の意識が高まり、脱原発を決め、再エネへの道を選びました。市民があげた声広がって実現したのです。日本でも、いくつかの原発計画が中止になったり、条例ができたりした背景には市民の力がありました。

気候危機は、農業など第一次産業や、教育、福祉、貧困問題など、あらゆる分野と関わる問題です。環境団体だけが取り組むべきものではありません。私たちは関わる人々を増やし、つながりを広げることで危機を乗り越えたいと思っています。YMCAは青少年をはじめ多様な方々とのネットワークをもっていますし「持続可能な地球」をビジョンに掲げています。環境教育をしたり、電力契約を再エネに切り替えたり（パワーシフト）もされている。ぜひ一緒に次世代のために活動していきたいと、期待しています。（聞き手・文 編集部）



世界の気候変動かるた

FoE Japanでは、気候危機や気候正義を楽しく学べるよう各種教材も作成しています。



「小さい私、弱いあなた～混迷の時代を生きる～」 全国学生YMCA リユニオン2025 報告

4月26日、全国の学生YMCA (学Y) につながる現役学生から卒業生 (シニア) まで85名が東京YWCAに会し、「全国学生YMCAリユニオン2025」を開催しました。開会礼拝では鳥取大学Yシニア板野靖雄氏によるメッセージとテーマ解題、主題講演には、東北学院大学Yシニア竹迫之牧師を迎え、長年のカルト問題への取り組みの現場から、「正しさ」とは何かという問いと、自分自身のあり方を考える時間が与えられました。若手・中堅のシニアによるパネルディスカッションでは、塩澤壮吾氏 (早稲田大学Y)、柳原絵里子氏 (中央大学Y)、新林智子氏 (九州大学Y) が社会人としての各々の働きの場で、学Y時代に与えられた視点や「問い」を持ちつつ日々格闘する声が語られました。学生寮で日々楽しく過ごしながらも、さまざまな国際プログラムへの参加の機会を得る中で貧困や戦争といった構造的な暴力にさらされた人々の現実「心を刺しぬかれた」(塩澤氏) 体験や、世界中の学生キリスト教運動とつながる中で“Personal is political.” (個人的なことは政治的なことである) という言葉が大きく響いたこと (新林氏)、地域の厳しい現場に出かけて「イエス・キリストの働きを見た」(柳原氏) 体験などが語られました。これらの、学生YMCAでの原体験の共有は、今まさに社会の多様な場で生きている私たち自身を原点に立ち返らせ、続くグループディスカッションで参加者一人一人が「自分にとって学Yとは」を豊かに分かち合うきっかけとなりました。

九州大学Yシニアの奇恵英氏による閉会礼拝メッセージに至るまで、学生YMCA運動が個人の成長の場だけにとどまらず、そこには常に、世界の中で弱く小さくされている者たちへの視点と真の平和を求める祈りがあること、「小ささ」「弱さ」の中に宿る真実の力がYMCA運動の源流であることを確信したひと時となりました。それはまた懇親会の時に発せられた現役学生からの「今年の夏期ゼミナールをみんなで作りたい!」という声によって、「小さな希望」の形となって表されました。

(日本YMCA同盟)



地震と内戦に苦しむミャンマーのため オンライン祈祷会100人参加

3月28日に発生した地震で、3000人を越す犠牲者が出ているミャンマー。内戦が続く中で、大地震は、いまだ被害の全容も明らかにされないなど、深刻な状況をもたらしています。現地のYMCAは建物の一部が損壊したものの、発災直後から食料や水など救援物資を配布して支援活動に奔走しており、各国YMCAはそれぞれ募金活動を行って現地をサポートしています。



日本のYMCAは、30年以上前からスタディーツアーやボランティア派遣を行うなどミャンマー各地のYMCAと親交があることから、地震直後から連絡を取り、募金を行っています。4月30日には、オンラインによる近況報告と祈祷会を開催。国内外から約100人が参加しました。

報告会では、アジア・太平洋YMCA同盟 (APAY) のベンセン主事より、各国の募金額と使途報告および今後の計画について説明された後、ミャンマー出身で大阪・高槻バプテスト教会牧師のマキンサンサンアウンさんより、メッセージが語られました。サンサン牧師は「2020年のコロナ禍以降、2021年には軍事クーデターが起き、翌年には国軍が民家1200軒を焼き討ちした。2023年には食糧危機。2024年には洪水が起きた。そして今も軍事政権下で投獄されている人たちがいる」と、ミャンマーの惨状を語るとともに、「二度とミャンマーのような場所を作らないよう共に支えあいながら歩みたい」「私たちは“種”です。どんな苦境にさらされても、いつか芽が出る時が来る」と述べました。

震源に近いマンダレーからオンライン参加の予定だったミャンマーYMCA同盟のマウンマウンウィン総主事は、電力不足の影響でインターネットに接続できず、事前資料のみの紹介となりましたが、後日、日本の支援に対しお礼のメールがありました。

ミャンマー YMCAは今後も安全な水の供給やメンタルケアなど、中長期的に活動予定です。引き続きご理解ご協力をお願いします。

【募金のお願い】

<https://www.ymcajapan.org/myanmar2025/>



水の事故から 子どもたちを守る

6月15日は ウォーターセーフティーデー

全国のYMCAは1981年から毎年6月～9月に「ウォーターセーフティーキャンペーン」を開催し、水の事故から身を守る方法を広く地域に伝えています。期間中の6月第3日曜日は「ウォーターセーフティーデー」とし、全国で一斉に着衣泳体験などのプログラムも行っています。ぜひご参加ください。

■YMCAの水上安全教育は

子どもの水泳教育に先駆的に取り組んできたYMCAは、日本だけでなくオーストラリアなど各国で水上安全教育に力を入れています。日ごろの水泳教室でも、泳力の向上とあわせて水上安全に関する知識と技術を身につけられるよう指導しています。

水の事故の多くは、岸から3m以内で起きています。誤って水に落ちると気が動転してしまい、いつもは泳げる距離でも思うように体が動かないためです。着衣泳体験は、着衣のまま水に入り、慌てずに浮いて待つなど、自分の生命を守る方法を体験しておくことで、いざという時の心理的な動揺を軽減する効果があると言われています。

十分な備えをした上で安全に、水辺での遊びを楽しめるよう、皆さまのご参加をお待ちしています。



ウォーターセーフティー WaterSafety

自分のいのちを守り、みんなのいのちを大切に



ウォーターセーフティーハンドブック

「溺れている人がいたらどうしたらいい?」など、水遊びの注意事項を子どもに分かりやすく紹介。AEDの使い方や救助法など、大人向けの知識も詳しく掲載しています。毎年、各地の教育委員会から後援をいただいて作成し、地域に無料で配布しています。

※サイトにはハンドブックや動画など資料と共に体験会の情報も掲載しています。ぜひご活用ください。

▶ <https://www.ymcajapan.org/campaign/watersafety/>

